
みかげつ記

へげぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みかげつ記

【Nコード】

N7735P

【作者名】

へげぞ

【あらすじ】

大淘汰で、単一の女クローンだけが生き残った未来。

赤ん坊の頃の記憶がある。ぼくは赤い胎内で羊水の中に浮かんでいた。それが、偉大なる聖母の子宮の中だったことをぼくはまだ知らない。後で見た母の顔はそれはすごく美しかった。

「ヒロト」

というくり返し聞く名前が自分の名前であることをぼくはだんだんと理解していった。ぼくは、羊水の中で早くも言語を学習していた。それは、ぼくが遺伝的につくられた高度な知性をもつためであった。ぼくの遺伝子の中には、日本語の文法を司る遺伝子が存在するのだと、ぼくの胎教に来る教師たちによって、教えられていた。ぼくは、自分の名前がヒロトなのだを知った。そして、やはり、何度もくり返し聞くマサミという名前が、その教師たち全員に共通した名前なのだを理解した。

ぼくの生まれた世界では、女の名前はみんな、マサミというのだ。ぼくは、胎教の間に、日本語と主な歴史、人物伝、算数、生物学、化学、物理学、経済学を覚えた。胎教の間に、講義は、大学院水準にまで達した。ぼくは、胎児の間にそれらをすべて覚えられる超天才児であったし、また、そのように遺伝的、教育的につくられていた。

あの驚くべき呼吸の衝撃のあった出産を経験して以後、ぼくは、母の名前もマサミというのだということを知り、めまいを覚えた。偉大なる母と、その他の女たちの名前が同じであるというのは、ちよっと簡単には容認できないことだった。ぼくは、ぼくに血と肉を分けてくれた母を敬愛していたし、胎教時代に母の語ることはみなの確であるとぼくには思えていた。

それは、母が、ぼくを産むために選ばれた最も優れたマサミであるためであったかもしれないが、ぼくには、母は他のマサミの中で最も美しい人であると思っていた。

そう、あの、三人の美少女との出会いがあるまでは。

出産されたぼくは、すぐに目が見えるようになった。そして、ぼくは見た。みんな、同じ顔をした美女たちの群れを。

ぼくが生まれる前、人類に<大淘汰>というできごとがあった。それは、全人類を世界一の美女だけにしてしまおうという狂信的計画のことであった。良いことなのか、悪いことなのかはわからず、それは実行された。世界を支配していた男たちにとって、世界一の美女を残して全人類を絶滅させることほど心地よい遊びはなかった。大勢の民衆がなぶり殺されたのだという。それはあまりにも凄惨なできごとだったという。肅清権をもつ者が世界一になれなかった美女たちを裸にして、犯し、邪魔をするものたちを虐殺した。非常に極悪なできごとだったと歴史書には記されている。

人妻が、未婚の女が、少女が、犯されて殺された。男は皆殺しだった。

世界一の美女以外、世界を構成するのに邪魔であるというのがその理由だった。人類は増えすぎたし、強くなりすぎていた。どうせ人類を減らすなら、最小限に減らした方が良い。なら、世界一の美女以外、皆殺しだというのである。

<大淘汰>によって、肅清権をもっていた男たちも、ちゃんと最後には死んでしまった。射精しすぎると、種がなくなるらしい。種切れになった男は、男根が立たなくなり、女をもう犯せないのだと思うと、おとなしく死んでいった。

ただ一人、世界一の美女だけは残された。そして、大量にクロール人間をつくりだし、人類の文明を維持した。

だから、ぼくが生まれた時、ぼく以外の男は、他には存在しなかったはずなのである。

ぼくは、世界一の美女たちに囲まれたただ一人の男の子だった。

ぼくが勃起するまで、全女がおとなしくしていた。

ぼくは、学術と芸術のスパルタ教育を受けながら、世界にたった

一人の男として育てられた。

つまり、ぼくは、女だけになってしまった世界で、女が存在することを熱望してつくりあげた世界一優秀な美男子だった。

そうだ。〈大淘汰〉によって生まれてきた女たちは、法律を改竄してでも、男がほしかったのである。

世界全部の女をぼくが犯してよいのだという。むしろ、無理矢理にでも犯させるという雰囲気が出た女たちの間にはあった。彼女たちはみな、同じ顔をした目がくらむほどの美女ばかりなのだ。

そして、ぼくの初めての相手を選ぶ妃選定の儀式が始まった。ぼくが精通し、勃起するようになったからである。マサミたちは、普段は服を着ているのが常だけれど、ぼくにだけ見えるように、ちらっとおっぱいや性器を露出させることがよくあったから、ぼくの煩惱はもんもんとして、誰が妃になっても良い、女ならば誰でも犯せるであろうと、そういう思いでいっぱいであった。

妃選びの儀式の日、主役のぼくはそこにはいなかった。マサミたちには内緒で、ぼくはこの世界のもっと大切な人のところへ会いに行っていたのだ。

マサミは世界一の美女ということになっている。しかし、その定義を月の民は受け付けなかった。マサミが世界一の美女に選ばれたのは、外面的な美しさだけではなく、運動面、健康面も考慮したことだった。だから、後世に残すのに、最もふさわしい人類はマサミであったかもしれないが、本当に世界一美しかったのは、別の少女だった。

それを月の民は知っていた。

だから、月の民は、本当に世界一美しかった少女を眠らせて、妃選びの儀式の日まで、保存していたのだった。

妃選びの儀式の日。マサミたちは、いじめられっこの末っ子を残して、お洒落していた。ドレスを着て、飾りをつけ、髪を整えていた。いじめられっこの末っ子だけは、今日はお留守番。妃選びの儀式にも出してもらえない。

可哀相な末っ子のマサミ。

でも、末っ子がいじめられていたのは、妃選びの儀式に出席できなかったのは、本当は別の理由。末っ子がいちばん栄養の摂取均衡が優れていて、いちばん美しかったから。

この家のマサミの末っ子は、妃に選ばれるかもしれないほどの凄いい美少女だったから。

だから、末っ子のマサミは、家に残された。妃選びの儀式に出席できずに。

泣く泣く末っ子のマサミの前に、魔法使いが現れた。

「可哀相な可哀相な女の子。みんなにいじめられて、見捨てられて

代わりに、男の子のいる宮殿に連れて行ってあげるから」

泣いていた末っ子のマサミは驚いた。いったい、どこから現れたのでしょうか。魔法使いなんて者がこの世に存在するわけではないのですが。

なぜなら、今はく大淘汰>の後なのですから。マサミ以外の人類は絶滅したはず。

「ついて来て。わたしたちが目指すのは、宮殿の裏の森です」

「でも、わたし、こんなに醜い服を着ていて。そこら中、破れているし、大きさも合っていないし、汚れているし」

「大丈夫。あなたのお姉さんよりも美しく着飾らせてあげるね」
魔法使いが魔法を使うと、末っ子の服はするりと脱げてしまった。全裸になった末っ子。

すると、見る見る繊維が肌を伝ってきて、末っ子を世界で一番綺麗な衣装に着飾らせてしまった。

透けるように美しい純白のドレス。いや、実際に、胸部の中心部は透けている。おっぱいの形がわかり、乳首の色が見えた。陰毛の色がわかり、腰のくびれが透けてわかる。髪は、袖を三つ編みに編み、薄紫の髪がたなびいた。薄灰紫の瞳の美少女だ。

文字通り、魔法で、末っ子は世界一の美少女に変身したのだ。

「あなたに名前をあげる」

「名前？ でも、私の名前はマサミ」

「ううん。これからはシンデレラと名のりなさい」

こうして、幸運の末っ子、シンデレラは、男の子のいる宮殿の裏の森へ、かぼちゃの馬車に乗せられて、走っていったのだった。

「魔法使いのお姉さん、お姉さんの名前は？ あなたは、黒い髪でとても長い髪で、私より美しそう」

「私は月の民、カグヤよ」

「カグヤ」

「うん」

「どうして、マサミ以外の女の人が生きているの？」

「それは、美しさのため。男の子のため。眠れる少女のため」

「いったい、それはどういうことですか」

漆黒の闇のような黒いドレスを着た長髪の女は、いった。

「私たちはこれから、眠れる森の美女に会いに行くの。目覚めの時が来たの」

眠れる森！

シンデレラは驚いた。

「マサミ以外の女の人が生きのびているの？」

「そう。本当に世界一美しかった女の子が生き残っているのよ。でも、彼女はあまりにも病弱すぎる。だから、月の民の私たちが守っていたの」

「月の民って何？」

「月から来た女の名です。みんな、名をカグヤといいます。美しさでは、あなたたちに負けるけど、能力では、とても、あなたたちでは適わないのよ」

「ええ。あなたは、私より、強くて賢そうですね」

「ずっと秘密にしていたの。眠れる森の美女と、その世話役である月の民のことを」

「今日、妃が決まるのではないのですか？」

「そう。今日、これから、決まるの。クローンタイプ0とクローンタイプ1のどちらが妃に選ばれるかが。それは、男の子の判断に任せられます」

「クローンタイプ1とは、私たちマサミのことですね。では、クローンタイプ0とは」

「クローンタイプ0とは、眠れる森の美女のことです。ちなみに、月の民の私たちは、クローンタイプ2」

ぼくは鏡でその光景を見ていた。

「ぼくが妃に選ぶのは、ぼくが気に入った子でいいんだよね」

「そうです、ヒロトさま」

「そうすると、偶然、運良くぼくのそばにいた子になる可能性が高いね」

「そうです、ヒロトさま」

「それはつまり、きみじゃないか」

「そうでしょうが、ヒロトさま。私はただの世話係のマサミにすぎません。月の民があなたをどこに導くのか、まったくわからないことです」

ぼくが宮殿の奥の間にいると、急に突風が吹いた。ばさばさ。そして、黒い服を着た色気のない女が現れ、ぼくを力づくで引っ張って行ってしまった。

まさか、妃選びの日にさらわれるなんて。

ぼくは、黒い服の長身の女に目を奪われた。初めて見るマサミでない女の顔だ。美しい。

「名を、あなたは名をなんというのか」

「私？ 私はカグヤ。ただの裏方でございます」

「顔しか、肌を見せないのか」

「あら？ ヒロトさま。お望みなら、お見せしますよ。カグヤもヒロトさまの下僕にすぎません」

窓が開け放たれ、ぼくは竜の背に乗った。カグヤは竜に乗って、かぼちゃの馬車を引き連れて、宮殿の裏の森へ飛んでいった。

ぼくは、カグヤの胸に分厚い服の上からしがみついていた。

気がつくと、唐突に、地面にドサツと下ろされた。裏の森の中だった。

ぼくは見た。森の中に、見たこともない美少女が眠っているのを。

ぼくは、一枚の布切れで腰を巻いている以外、全裸だった。

ぼくが、世界一の美女が選んだ美少年ヒロト。

そして、ぼくの目の前に、紺の服を着て眠る眠れる森の美女がいた。

ぼくと、眠れる森の美女の間を竜を従える黒服の月の民カグヤがいた。

そして、ぼくらの後ろから、かぼちゃの馬車から降りた世界一の美少女シンデレラが走ってきていた。

「さあ、妃選びの儀です」

カグヤがいった。

「最も交わりたい女を選んで、抱き寄せなさい」

三人の美少女がぼくのそばにいた。

「ここに眠っている子の名前は何？」

「ユウナです」

ぼくは、シンデレラもカグヤもそでにして、眠れる森の美女を選び、キスをした。

ぱっと、眠れる森の美女が目覚めた。世界一の美しい美少女だった。茶髪で黒眼、病弱な青白い肌をしている。

「誰？」

「しい〜〜〜」

ぼくはカグヤとシンデレラを黙らせた。

眠れる森の美女とぼくの目が会う。

「ぼくの名前はヒロト。町の貴公子ヒロト」

ぼくはユウナを抱きかかえて、森のベッドから運び出した。

「きみの服を脱がしていいかい？」

ユウナはぽつと赤くなって、

「あなたがわたしの良き人ならば」といった。

「がはははは、ヒロトのやつ、ここにいるのか」

またしても、いるはずのない人類が現れた。それは大きな男で、名を野獣と叫んだ。

「まずい。ユウナを隠せ」

ぼくが指示を出すと、カグヤが迅速に半裸のユウナを木の中に隠した。

「お前は誰だ？ 見ない顔だな、黒い服」

野獣が怒鳴った。

「わたしはカグヤ。月の民です」

「そうか。マサミ以外にも女がいたか。だが、世界一の美女はもらって行く」

そして、野獣はシンデレラを力づくで連れ去っていったのでした。

野獣の家で、シンデレラは、男根というものを初めて知りました。

「なぜ、乱暴をするの？ 私を愛してはくれないのですか、あなたは？ あなたも男なのでしょう？」

すると、急にしおらしくなった野獣は、ぺこりとシンデレラに頭を下げました。

「私は醜い野獣です。力づくで、あなたを連れ去ったことをお詫びします。シンデレラ、私のことを愛してくれませんか」

「お食事をくれるのなら、考えなくもないわ」

シンデレラはいいました。

「はい。食事でございます」

野獣はとても美味しい肉料理を差し出しました。

シンデレラはそれを食べてとても満悦。

そのまま、野獣と、行為に及びました。

「ずっと、ずっと、この時を待っていた。世界を滅ぼしてでも、世

界一の美女と寝る。それが男の夢ってやつじゃないか」

野獣は<大淘汰>を秘かに生きのびた悪人なのでした。

野獣がシンデレラとやってる頃、ヒロトはユウナと性交していました。それは、とても耽美で美しく、快樂に溺れる墮落した行為でした。

ヒロトがユウナと三回目の射精を終える頃、野獣はやっとシンデレラと二回目の性交が終わったところでした。

「あん？ マサミ以外にも美女がいるのか？」

ユウナの存在に気がついた野獣は、ヒロトを殺した。

部屋の機械を操作して、森にいるヒロトを狙撃した。

そして、ぼくは射殺されて死んだ。

ぼくが目覚めた時、森の中、目の前でユウナは裸のまま泣いていた。

「無理矢理、汚されてしまいました」

ぼくは驚いて、ユウナの元に走り寄ると、そこには、死んだぼくがいた。ぼくの死体があった。

「ぼくを殺したのは、野獣だな」

「はい」

「ぼくはやられたまま黙っている男ではない。戦う時は戦う」

「でも、あなたは誰？」

何？

ぼくはヒロトではないのか。

「安心しろ。ぼくはヒロトだ」

「まあ。男の人は体がふたつあるのかしら？」

ユウナは驚いていた。

「カグヤ、いるな」

「はい」

「武器を出せ」

「ご自由にお選びください」

剣に、狙撃銃、ロケットランチャーに、分散並列処理型分子大ナノロボがあった。

ぼくは、全部を装備する。

「野獣はどこだ」

ナノロボが探知して位置を示した。

とりあえず、ロケットランチャーをぶっ放す。

「きゃあ」

崩れた野獣の屋敷の部屋から、シンデレラの悲鳴が聞こえた。

「必ず助け出す」

ぼくは、野獣を狙撃銃で狙った。

「どこだ、ヒロト。どこからでもかかって来い」

斧を持って構えている野獣を森から狙撃する。命中。野獣は倒れた。

「行こう、ユウナ」

それから、ユウナとシンデレラとの3Pだった。三人とも感じまくっていた。

「はあはあ。カグヤ、きみも脱げ」

「はい、ヒロトさま」

カグヤの黒い服が解けて、巨乳が見えた。

「全員のカグヤ、出て来い」

「はい、ヒロトさま」

何百人のカグヤが黒い服を脱ぎながら出てきた。

「これから、毎日、毎日、ユウナとシンデレラとカグヤとマサミを抱くんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7735p/>

みかげつ記

2010年12月28日16時30分発行